
恨む人と嫌う人

藍絃

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

恨む人と嫌う人

【Nコード】

N0087C

【作者名】

藍絃

【あらすじ】

レグルスがアルカナのメンバーの1人となった頃、彼はグラウディアが嫌いだった。理由はグラウディアと共に向かった町での出来事、一体そこで何があったのか。そしてレグルスが何もできなかったその事実の真実とは？

アルカナの昼は食堂で食べることが基本的である。

いつもは激務に明け暮れるアルカナの人々も、この時ばかりは穏やかに過ごしたいと考えている。はずだったがその食堂に何か割れるような音が響いた。

「てめえっ！ 今、何て言った!？」

アルカナのメンバーたちは若い男の怒鳴り声を聞いた。しかしそちらを向く人は皆無であった。

ただ、いつものことであるため見ないように、関わらないようにしている。

騒ぎの中心である席のほうでは黒ずくめの青年グラウディアと、最近アルカナのメンバーとなった金髪と銀のオーバーコートを着た若い男レグルスがグラウディアをつかみあげているところだった。

「愚かだ、と言った。」

「違うっ、その前のところのことだ!!」

頭に血が上ってしまったているレグルスが、憤然としてグラウディアを睨みつける。

つかみあげられているというのに、グラウディアの瞳は、零度に達していた。

互いに相手に向かって怒っているのだ、ただし、レグルスのように怒鳴ることをしないグラウディアの方が、本気で怒った時の方が恐ろしいことを知っている。

「余計な力を誇示して殺しをするな愚か者が」

淡淡としたグラウディアの言葉で、完全に血を上らせたレグルスが、「力」を使って力の限りグラウディアを投げ飛ばす。

だがグラウディアだって生身だ、このまま何もしなければ激突して粉々にされてしまうだろう、しかしグラウディアは今まさにぶつかるうとした瞬間に自ら足で壁に軽く触れた。

そして何事もなかったかのように闇のごとく黒いオーバーコートについた白い埃をはいた。

それと同時に背後では壁に、くもの巣のようなヒビが入る。

直後、崩壊の音と共に壁が崩れ、隣にあった無人の部屋のぞけることになった。

おお怖い怖い、我関せず。アルカナの人々は、巻き込まれることを面倒とし、やはりグラウディアとレグルスを止めなかった。

「さて、と」

グラウディアは、粉塵を上げて崩れ去る壁を気にせず目の前で殴りかかるうとしているレグルスの方へ向いて早口に言葉を紡いでいく。

手元には、黒い本。

「死刑、しつこ……っ?!」

執行、と言おうとしたグラウディアの口がふさがれ、驚いたグラウディアは殴りかかるうとしたレグルスを見たが、レグルスも何者かによって動きを止めている。

レグルスを押さえたのは女性、対してグラウディアを抑えたのは男性だった。

「殺すな、ラウディ」

落ち着いた声だった。グラウディアの思考が急速に冷えていく。冷えた頭で、とりあえず口を塞ぐ手を軽く払った。

「ハー、ミット？」

グラウディアの声が、少し恐れるような響きを含んだ。

「何があつた。ラウディ」

ハーミットと呼ばれた者は、レグルスを動けなくしている女性と共にグラウディアへと聞いた。

理性的なグラウディアに聞くほうが早いと考えたからだ。

「……余計なことをした馬鹿が“審判をする者”を増やしただけだ、ハーミット」

「その名ではなくハーシエルと呼べと言っただろう、おい、ラウディ！」

いつの間にかハーシエルの腕をすり抜けたグラウディアは自室へと戻っていく、そんな彼を見てレグルスは吐き捨てるように言った。

「偽善者が」

そう言ったがそれが、グラウディアの耳に届いたかどうかはわからないが、レグルスは言いたいことを言い終わるとグラウディアと同じく、すり抜けて彼とは正反対の方向へと肩を怒らせながら

歩いていった。

2人の教官役をしているハーミットとウエヌスは、何も言わず、軽く溜め息をついた。

はあと溜め息が、薄暗い部屋へと流れて消えた。早々に自室に戻ってきたグラウディアは硬く寝心地の悪いベッドに腰をかけていた。

そして黒く指先のところだけは出るようにしてある手袋をじっと凝視する、

出る

そう念じると手には黒い本があらわれている、グラウディアはその本のページをめくった。

ページには何もかかれてはいないはずなのにグラウディアには、何が書かれているのが見えている。

グラウディアは、軽く眉間にしわを寄せた。

「呼んでいる、のか？」

何かに呼ばれたと感じたグラウディアは、何かの呼ぶほうへと歩き出していた。

導かれるままに進んでいく、誰かが振り向こうと気にしない、彼はただ呼ばれるがままに外に出る。

彼は黒い本に書かれる“見えない文字”に導かれるままに進んでいく、その時やけに目立つ金髪を見かけた気がしたが、グラウディアの頭の中からそんな情報はすぐに消えていった。

真昼の太陽を身に受けグラウディアが導かれた場所は、先ほど滅ぼさせてしまった町。

「すまない、俺がいながら、俺が、止められなかった。」

黒い本がその無念さをあらわすようにページへ赤い字を刻みだす。

痛い、怖い、どうして、僕らは、私たちは何もしていないのに、どうして?!

死んだものたちの強い気持ちグラウディアの心を侵食しようと試みてくる。

「やめる、俺なんてのっつっても価値はない、俺は俺にできることをやるっ」

そして軽く息を吸うとグラウディアは、黒い本を持った反対側の手でページに触れて一気にめくる、先ほどとは違う、優しい声色で言葉を紡いでいった。

「お前たちの心に安寧が訪れるよう判決を下す。その心洗われるまで世界を旅せよ」

いくつもの光が弾けて飛んでいく、中にはそのまま天へと昇っていくものもあった。グラウディアはそのすべての光が消えるまで見ていた。

すべての光が消えたのはもうあたりが暗闇に支配されだした頃だ、グラウディアの背後に何者かの気配が忍び寄るがグラウディアは、それが誰なのかを知っていた。

振り向かず、近づいてきた気配に向かって、言った。

「ハーシエルにレグルス、何の用だ?」

「私はただ道案内をしたただけだ」

そう言つてハーシエルは、レグルスの方へと顔を向けた。
ハーシエルを胡乱気に見たグラウディアは、また視線を町のほうへと戻した。

「お前、何やってたんだ」

天へと昇つていく光を、少しだけが見たレグルスは、声に驚きを含めてそう言つた。

だがグラウディアの返事はそつけないものだった。

「答える必要はない、ハーシエル、俺は少し出かける」

黒い本のまた違ったページを開いて何事かを呟いたグラウディアは、ふつと姿を消した。

「まったく……」

「おい、あいつどこ行つたんだ?!」

グラウディアの消えた理由を知っているハーシエルは、軽く溜め息をついたがレグルスは消えた理由も消えた原理さえもわからないためそう聞くしかなかった。

しかしそこには理由を知っているはずのハーシエルの姿はなくなつていた。姿が見えなくなったハーシエルは、姿を消す前、去り際に告げた。

「真実とは自らつかむものだ」

まるで諭すような言葉に気分を悪くしたレグルスは、アルカナ内での教官にあたる者、さきほど食堂での喧嘩を止めに来た女性に

言われたことを思い出す。

「ウエヌス……」

（あいつはいつだって一人で感情を押し殺してる、ハーシエルに對しては嬉しそうな顔をしているけど、そんな顔あいつはあまりしないし見せようとしてもしない、だからあたしは驚いたんだ、あいつがあんたに對して感情を表にして怒っていることに、あいつはきつとあんたに大切なことを教えてくれるだろうさ）

「ふざけるな、大切なこと？ あいつがやっているのは大切なものを奪うことだけだ！！」

レグルスは感情に流されるがままに地面を殴る、だが痛みも何もない、いや、感じないような“術”を習ったからだ、それが余計にレグルスを苛つかせた。

滅ぼされた町はもう人気も何もない、そこで何があつたかすらも黙認するように。

町は襲われる前はきつと平穩でいい土地だったのだろう、だがグラウディアとレグルスの2人で初めて任務を受け、そこに着いたとき、町の面影は残っていないなかった。

残っていたのは今まさに略奪した品々を運ぼうとする賊と、人身売買に使われてしまうのか泣き叫ぶ子供と金切り声を上げる女性、遅かった。

そう思ったのは様子を冷静に見ていたグラウディアだった。

レグルスは、目の前の光景を信じられないとでも言うように見ていたと思つた次の瞬間には賊のほうへと突撃していた。

いきなりの事態に驚いたグラウディアだったが、すぐに思考を整理してレグルスを追う、このまま戦いに入れば人質にも近い存在である子供と女性たちに被害が及ぶと考えたグラウディアの思考がはじき出した結果。

「うおおおおっ！！」

レグルスの拳から放たれた“術”は鋭い風の刃を生んだ、それらは子供や女性の体をすり抜けると賊のみを無残にも切り裂く、そしてまた別の叫び声があがる。

血を吹きながら目の前で倒れていく賊、しかし彼らも人間なのだ。

痛みを感じ、悲しみ、生きる人間なのだということを金髪の暗殺者は忘れていた。

人を傷つけるレグルスは、下手をすれば略奪者よりも怖いものに見えたのかもしれない。

「やめる、レグルス！」

グラウディアが声を荒げるとそれに反応したレグルスが振り向く。

「そうだ、やめる、俺たちの仕事は……」

振り向いたことよって停止を促そうとしたグラウディアの体が、

遠方にある大木に叩きつけられる。

ごきりと嫌な音がして肺から酸素が逃げていく、レグルスを止めようとしたときに初歩的な術の一つである簡単な防衛術をかけておいた自分自身に感謝をしながらグラウディアは立つ。

その時ふとレグルスの方へと視線を合わせてみると口の動きだけで何かを伝えてきた。

「俺の邪魔をするな」

それでもグラウディアは止めようとするが、体の全身がしびれたように動かない、そのせいでレグルスによる一方的な処刑をとめることもできずに見ることになった。

子供が泣く、女性が子供に目を開かせないように、見させないように強く抱いている、しかし泣き叫んでいるのは何も町の生き残りだけではなかった。

グラウディアは動かない体を叱咤しながら見た。賊の中にまだ少年である男の子がいたのだ。

彼は必死に賊たちが次々と倒されていると言うのに逃げもせずただひたすらに何かを守っている、それが何なのか目を凝らしてグラウディアは見ようとした。

あと一歩だ、そう思つてさらに術まで使つてその何かを見ようと力を使おうとした。その瞬間、少年の体が吹き飛んだ、叩きつけられたのは頭。

きつと助からない　グラウディアは直感的にそう悟る、しかし少年はそれでも立ち上がった。

「何故………?」

そう呟いたとき、グラウディアの体から痺れが消え、動くようになっていた。

早く、早く行ってあの少年を助けなければ、何故かそんな考えが頭をよぎる、そして黒い本を召喚して叫んだ。

「全てのものに過ちを正すべき時間を！　タイムストップ!!」

時が、止まる。

それはグラウディアの持つ“審判”の名においてのみ行使のできる術、彼は一步も動かない人々の間を縫って少年のもとへと辿り着く、瞳孔が開ききっている。グラウディアが見ているのは動かない死人だ、もう動かない。

そこでグラウディアは少年の守っていたものを見た。かわいらしい赤子だった。

ただその顔は血で薄汚れてしまっている、何故少年は？
そんな考えが浮かぶがグラウディアは自分の体から少しずつ力が抜けてくを感じた。この術自体本人の体力をあっという間に奪っていつてしまうのだ、術を解こうとした時、誰かがグラウディアを呼んだ。

(ラウディ、終わったか?)

脳に直接響く声、グラウディアのよく知る人物ハーシエルの声だった。

「ああ、いつものように“始末”をして帰る、そう、いつものように”」

グラウディアの声に何か暗く思い感情が混ざるが脳での直接会話だ、そのためグラウディアの心の暗い響きをハーシエルは聞き取ることはできなかった。

そしてグラウディアは、いつものように全ての事実を葬るために自らの役目を思い出し、実行する。

「我が“審判”の名において全てに裁きを、判決を下す。罪あるべきもの、なきもの、すべての記憶を私が背負おう、さあ！裁きは下された。行くがいい!!」

グラウディアの下した判決はここでおきた全ての記憶をグラウディアへと蓄積させ、そして“かわりの記憶”を人々の記憶に埋め込むものだ。

それがすべてすんだ頃、グラウディアはそこに何があつたかという痕跡をすべて消し去るためにあらわれた人物に軽く礼をすると、すでに記憶の入れ替えの済んだレグルスを担いで姿を消す。

町人には何も無い日々を送っている記憶へ、レグルスへ入れ替えられた記憶は“何もできずただその惨殺の場面を見てしまった”という記憶だった。

俺のしていることは、偽善。なのだろうか。長いことその考えを封じていたグラウディアは、気分が悪くなり頭をおさえた。

「ウエヌス、俺はやっぱりあいつが嫌いだ、余計な力も何も、“それを使った”のはあいつなのに………やっぱりわからない、何が真実なのか」

それを答えるものには、いなかった。

グラウディアは痕跡すべて消し去った者が人を葬ったとされる荒地で歌った。

……あの赤子はあるべきところで育てられる、俺が救えた唯一の

歌に何か悲しい響きが含まれる、それは誰に向けたものなのか、それを知るのはきつと本人のみだろう。

恨む人と嫌う人

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0087c/>

恨む人と嫌う人

2008年11月7日06時31分発行